「波乱のタイ：政権交代の舞台裏」

210781165 牧野　麗

はじめに

a）タイ政権
　ア）立憲君主制移行後
　→軍事政権と民政を繰り返し不安定

b）21世紀以降
　ア）タクシン派対立
　イ）軍介入で政治分断が深刻化

c）2020年以降
　ア）若者主導の抗議行動
　→王室改革や不敬罪批判が活発化
　イ）最大野党「前進党」
　　i）王室改革→支持を集客
　　ii）憲法裁が解党の危機を指摘
　ウ）保守派と民主化派の対立が継続

本論文はタイの政権の変遷と社会的影響を分析

第1章 「タイの発展と挑戦：第二次世界大戦までの歴史」

第1節　タイの概要

第2節　タイ族の歴史と国家形成の軌跡

第3節　第二次世界大戦期のタイ：同盟と逆境

第1節　タイの概要

a）タイの概要

ア）東南アジアのインドシナ半島中央に位置

イ）隣国はラオス、カンボジア、マレーシア、ミャンマー

ウ）面積は約51.3万平方キロメートル

→日本の**約1.5倍**

エ）首都は**バンコク**

オ）人口**約6600万人**（2022年末）

（バンコク首都圏には約1000万人が住む。）

b）主な信仰は**上座仏教**

c）日本との関係

ア）**約6000年前～**
琉球（現在の沖縄県）に船が到来

イ）1887年
「修好条約締結方二関スル日暹宣言書」

ウ）2024年で国交樹立**137年**

エ）年間**約130万人**の日本人が訪問
観光と経済交流が活発

第2節　タイ族の歴史と国家形成の軌跡

a）タイ族の起源
　ア) 中国南部からの移住
　イ) 紀元前1000年頃、中国内で漢民族の勢力が拡大
　ウ）タイ・カダイ語族は四川・雲南省に定住
　エ）農耕を中心とした生活、稲作を主な生業

b)「むら（ムーバン）」が形成
　ア）「むら」のリーダーが政治権力を獲得
　　→「くに（ムアン）」を形成

c) 13世紀、スコータイ王朝の成立
　ア）文化的繁栄
　イ）ラームカムヘーン王

d)アユタヤ王朝の成立とその地理的条件

ア）中央集権的な政治体制
イ）文化、芸術、建築の発展
ウ）ビルマ（＝ミャンマー）によって滅亡

e）トンブリー王国

ア）将軍タークシンがタイの統一を目標

イ）1767年：トンブリーを首都とし建国

ウ）ビルマや他の反乱勢力と戦闘→統一

f） チャクリー王朝

ア）チャクリー将軍（後のラーマ1世）

イ）1782年：バンコクを首都とし、チャクリー王朝建国

ウ）タイの再建と安定化、文化や宗教の復興

ラーマ4世

ラーマ6世

g) バンコクへの遷都

ア）**ラーマ4世**の近代化と西洋との交流

イ）**ラーマ5世**の行政改革、奴隷制廃止
教育制度の導入

ウ）**ラーマ6世**のナショナリズムの促進

ラーマ5世

第３節　第一次世界大戦～第二次世界大戦のタイ：同盟と逆境

a）1914年、第一次世界大戦の勃発
　ア）タイ、中立を宣言
　イ）1917年、ラーマ6世が連合国側で参戦を決定
　ウ）タイ、ドイツとオーストリア＝ハンガリーに宣戦布告

b）戦後
　ア）タイは不平等条約の撤廃を要求
　イ）アメリカ、関税自主権の回復を容認
　ウ）ラーマ7世の王位継承と財政難
　エ）絶対王政への批判とクーデター計画

c) 立憲君主制
ア）1932年：人民党のクーデターと立憲君主制への移行
イ）1933年：プリーディーの経済計画とクーデター
ウ）1935年：ラーマ8世の即位と摂政の設置
エ）1938年：ピブーンの首相就任と「タイ化」政策

d）第二次世界大戦
ア）1939年：第二次世界大戦の勃発と仏泰戦争
イ）1941年：日本との同盟とタイの領土拡大
ウ）1944年：ピブーンの辞任
エ）「自由タイ」の活動とクアン・アパイウォンの首相就任

e) 1945年、日本の降伏とタイの戦後処理
ア）国際連合への加盟と戦後の独立
イ）戦争を通じたタイの近代国家としての発展

ピブーン首相

第2章 「戦後タイの歩み：冷戦下の権力闘争」

第1節　戦後タイの政治動乱と冷戦下の再編
第2節　冷戦期タイの政治と権力闘争：ピブーンからサリットへ
第3節　タノーム政権による開発戦略とタイ社会の変化

第１節　戦後タイの政治動乱と冷戦下の再編

ラーマ9世

a) 第二次世界大戦終戦後

ア）タイの政治不安

イ）クアン政権の退陣と自由タイのメンバーの首相就任

b) ラーマ8世の帰国とプリーディーの首相就任

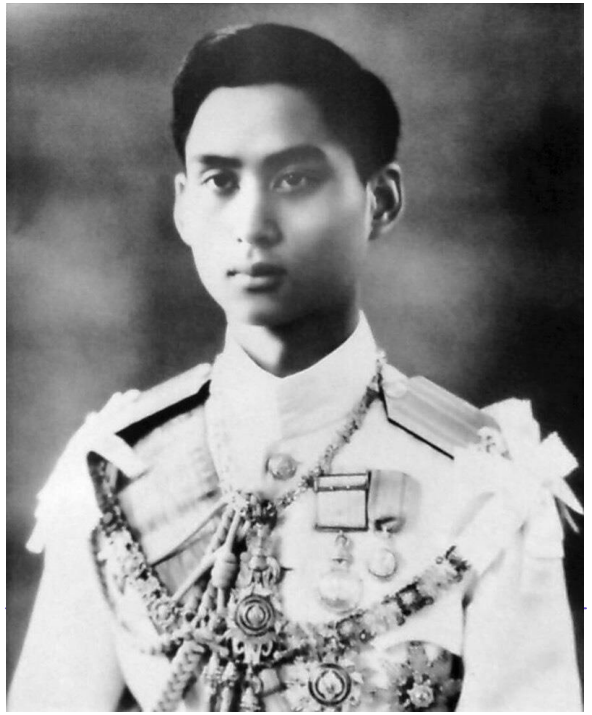
ア）1946年の民主的新憲法の公布

イ）ラーマ8世の怪死事件

ウ）ラーマ9世の即位とスイスへの帰国

エ）プリーディーの辞任とクアンの首相就任

オ）ルアン・タムロンの首相就任と政情不安



ラーマ8世

c) 1947年の陸軍クーデターとピブーンの再登場
ア）プリーディーの亡命と1949年の王宮反乱
イ）1951年の海軍クーデター失敗とピブーンの議会廃止
ウ）ピブーン政権の反共姿勢

d）アメリカとの関係
ア）経済技術協力協定と相互防衛援助協定の締結
イ）1950年の朝鮮戦争へのタイの援軍派遣
ウ）1954年の東南アジア条約機構（SEATO）の設立
エ）日本との国交回復と特別円返済問題
オ）インフラ整備と軍備増強

第2節　冷戦期タイの政治と権力闘争：ピブーンからサリットへ

a) ピブーン政権の西側諸国のサポート

ア）パオ・シーヤーノンとサリット・タナラットの権力掌握

イ）ピブーンの選挙合法化と労働組合活動の認可

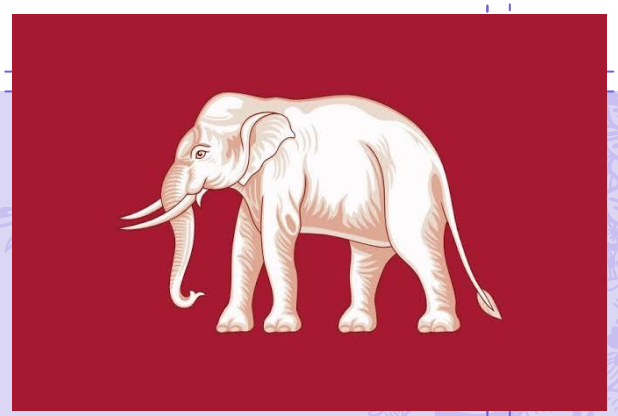
ウ）1957年の総選挙と不正選挙

b) サリットのピブーン批判とクーデター

ア）ピブーンの亡命

イ）サリットの暫定政権と**タノーム・キッティカチョーン**の首相任命

（タイ王国の軍人、政治家）



c) 1958年の再クーデターと憲法廃止

ア）サリットの「革命」とクーデターの正当化
イ）サリットの「開発（パッタナー）」スローガンと権威主義体制

d）国王の権威復活と独裁体制の正当化

ア）「民族・宗教・国王」の三原理の強調
イ）国王を元首とする「タイ式民主主義」の主張
ウ）国民の父としての国王の理想像の強調
エ）ラーマ9世の「国民の父」としてのイメージ創造

第３節　タノーム政権による開発戦略とタイ社会の変化

a)　サリットの死後

ア）タノームによる「開発」を掲げた独裁体制の継承

イ）タノームとプラパート・チャールサティアンの二人三脚態勢

b) 共産勢力との本格的な戦いの開始

ア）ラオス国内の政治不安定化によるタイの役割強化

イ）タイ共産党の武力闘争と解放区の設置

ウ）　政府の共産主義対抗策としてのインフラ整備推進

c) ラック・タイの強調と「国民の父」としての国王のイメージ戦略
ア）ベトナム戦争へのタイの協力
イ）タイ国内のアメリカ軍基地の設置と周辺の商売繁盛
ウ）パッタヤーの歓楽街からビーチリゾートへの発展

b）ラーマ9世の地方訪問と王室計画への関与
ア）メディアによる国王の存在感の増大
イ）経済ナショナリズム
→外国投資奨励策への転換
ウ）インフラ整備の強化と外資導入型工業化
エ）1960年代のタイの経済発展

第３章　タイの政治動乱：学生運動、独裁崩壊、そして王国の再構築

第１節　タイ学生運動と独裁政権の崩壊
（10月14日事件から10月6日事件まで）

第2節　北風と太陽の闘争：タイ政治の転換点

第3節　経済成長の波に乗るタイ：ブームの幕開け

第１節　タイ学生運動と独裁政権の崩壊（10月14日事件から10月6日事件まで）

a）1968年の憲法公布と総選挙
　ア）国会運営失敗による1971年のクーデター
　イ）民主主義後退への学生の反発
　ウ）タイ全国学生センターの設立と運動拡大

b）日本企業と日本人の増加
　ア）日本製品の輸入増加と貿易赤字の拡大
　イ）1972年の日本製品不買運動

c） 独裁政権への不満とタノーム政権打倒運動

ア） 1973年の憲法制定要求運動と「10月14日事件」

イ） タノーム辞任後の臨時首相サンヤー任命

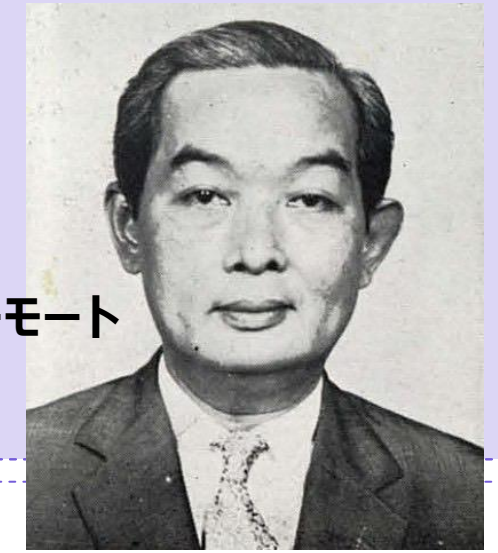
d） 農村貧困対策を掲げたククリット政権

ア） 1976年の右派団体による左派勢力への対抗

イ） タノーム帰国

→学生抗議と「10月6日事件」

セーニー・プラーモート



ククリット・プラーモート

タノーム

第2節　北風と太陽の闘争：タイ政治の転換点

a）10月6日事件後のターニン首相任命と共産主義弾圧
　ア）　学生や運動家の解放区への逃避と共産党活動の活発化
　イ）　ターニンの強硬政策への国民と軍の不支持
　ウ）　1977年の軍によるクーデターでターニン政権崩壊

b）クリエンサック首相の柔軟政策と恩赦
　ア）　左派との関係改善を促進：「太陽」政策
　イ）　1978年の憲法制定と1979年の総選挙

ターニン・クライウィチエン

クリエンサック・チョマナン

c）第2次オイルショックによる経済問題とクリエンサック辞任

ア）　インドシナ諸国からの難民流入

→　難民キャンプ設置

イ）　プレーム首相による「半分の民主主義」体制

d）クーデター失敗と国王の同意の重要性

ア）　左派投降者への受け入れ

→　共産勢力の衰退

プレーム・ティンスーラーノン

第3節　経済成長の波に乗るタイ：ブームの幕開け

a）第2次オイルショック後のタイ経済の停滞
　ア）　プレーム政権の官民連携政策と経済成長
　イ）　1985年のプラザ合意による円高と日系企業の進出
　ウ）　工業化と外資流入による1980年代の経済ブーム

b）1988年のプレーム退陣とチャートチャーイ政権の発足
　ア）　インドシナ経済圏構想と利権争いの激化
　イ）　1991年の軍によるクーデターとアナン政権の発足

チャートチャーイ・チュンハワン

❶

アナン・パンヤーラチュン

❷

❸

スチンダー・クラープラユーン

c） 1992年のスチンダー首相選出と都市中間層の反発

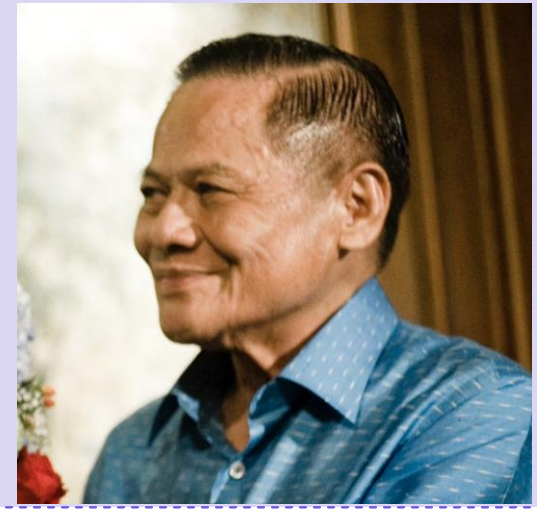
ア） 5月の大規模デモと国王による仲裁

d） チュワン政権の発足と政治改革の停滞

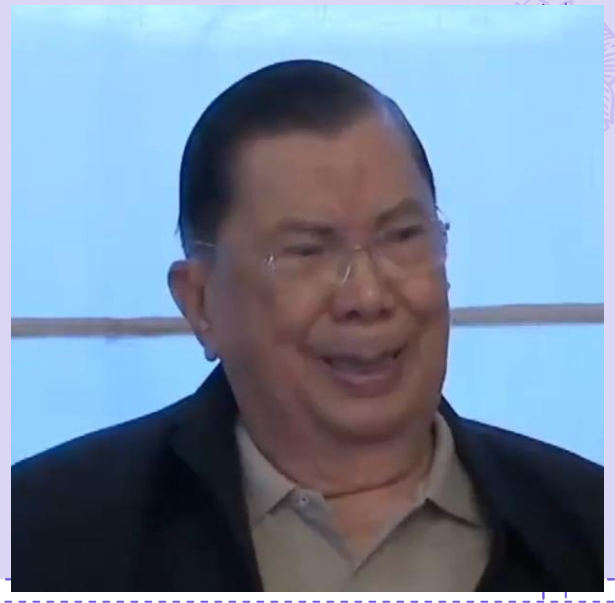
ア） バンハーン政権の金権政治と憲法改正の推進

イ） 1997年のアジア通貨危機とIMF支援

チュワン・リークパイ



バンハーン・シラパアーチャー



チャワリット・ヨンチャイユット

第4章　経済危機から民主化の波へ：タイ現代史の光と影

第1節　通貨危機からクーデターへ

第2節　赤と黄の衝突：タイ政治危機とクーデターの連鎖

第3節　タイの民主化運動と若者の挑戦

第1節　通貨危機からクーデターへ

a) 1997年、バーツ暴落
　ア）チャワリット政権が新憲法を公布
　イ）通貨危機対応不十分
　　→チャワリット政権辞任
　ウ）民主党が連立政権

1ドル＝38バーツに下落したタイバーツ

b) 経済回復も国民の不満増加
　ア）タックシンが支持を集客
　イ）タックシン（中国系タイ人実業家）
　ウ）1998年タイ愛国党結成

c) 2001年総選挙で圧勝

ア）農民向け公約

イ）「借金猶予、30バーツ医療」 実行

ウ）「タックシノミクス」、経済成長と貧困解消

d） 2005年圧勝で文民単独政権

ア）インフラ整備進行も強権批判

イ）自社株売却疑惑で反タックシン運動拡大

ウ）議会解散

エ）2006年、軍のクーデターでタックシン政権崩壊

第2節　赤と黄の衝突：タイ政治危機とクーデターの連鎖

a）2006年の軍事クーデター
　ア）スラユットが暫定首相
　　→新憲法が制定

b）2007年の選挙
　ア）親タックシン派のサマックが首相に就任
　イ）反タックシン派との対立が激化
　　→政権は崩壊

c）アピシット政権が誕生
　ア）赤シャツ派との対立継続
　イ）2011年：インラック政権が発足
　ウ）洪水や反タックシン派の抗議

d）2014年に軍事クーデター
　ア）プラユットが政権を掌握
　イ）軍の影響力
　　→政治的安定と経済成長は難航

第3節　タイの民主化運動と若者の挑戦

a）プラユット首相
　ア）2014年の軍事クーデター後
　→2019年の総選挙まで
　　暫定政権を維持
　イ）選挙後
　→親タックシン派と反タックシン派の
　　対立は継続

b）新未来党が急成長
　ア）憲法裁判所により解党
　イ）これに対し、学生中心の抗議運動が拡大
　ウ）政治的自由や君主制改革を要求

c）コロナ禍で活動が一時縮小
　ア）2021年
　→政府のコロナ対策への不満からデモが再燃
　イ）王室改革要請運動は憲法違反
　ウ）学生たちの活動は困難な状況

第５章　今後の展望

今後の展望

a） 今後のタイの政治
　ア） 「王政の行方」と「若者の動き」が大きく影響
　イ） 若者は民主派政党「前進党」を支持
　　i） 政治改革や社会的公正を要求
　ウ） 2024年の上院選挙
　　→政治プロセスに変化を致す可能性大

王制政治に

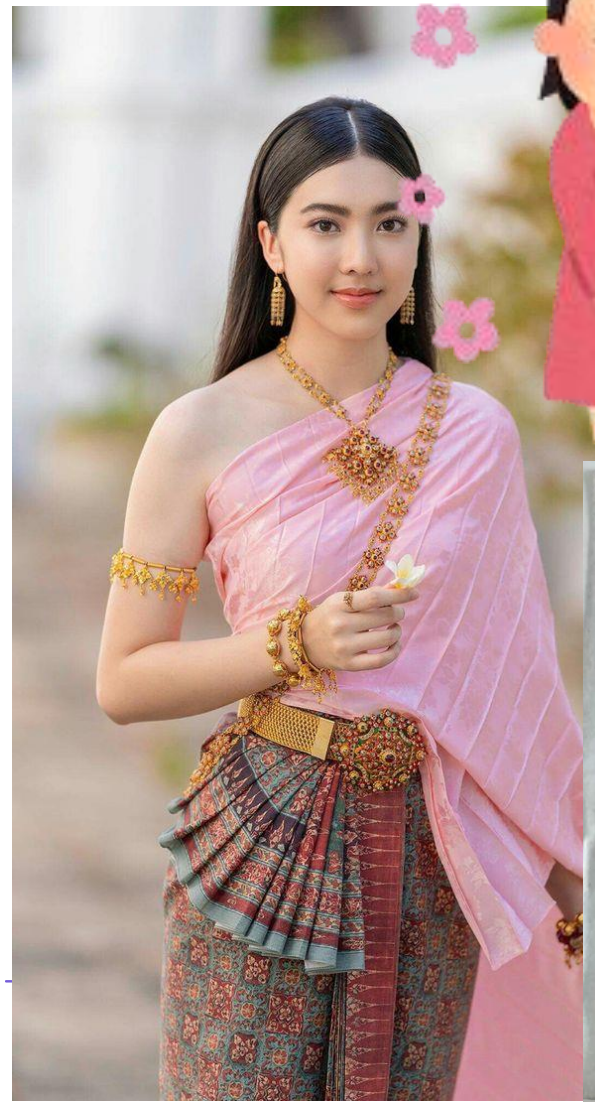
賛成の年配国民 VS 反対の若者

b） 経済面

ア）若者がデジタル技術やスタートアップ分野で活躍
　　→投資促進や産業発展に貢献

イ）しかし、軍や保守派の抑圧が課題
　　→若者の活動が制限

ウ）短期的には政治不安が継続
　　i） 若者の影響力
　　→民主的で包摂的な社会への移行が期待

エ）王政の動向は依然としてタイの未来の重要な要素

Thank you for listening!!